

## 守れ！子供と女性②

——警察官僚から弁護士に転身。もともとほとんど少年時代を過ごしましたが後藤 子供の頃から野球に夢中で、灘中では野球部に入りました。たが弱小球部で、部員が10人しかいない中で補欠という状況でしたが、とても楽しかったです。当時、兵庫県内の男子中学生は丸刈りが基本でしたが、灘中は頭髪も自由だった。私は自分で丸坊主にしていました。それぐらい野球に打ち込みましたね。親の勧めで進学した中学、高校は、非常に自由な校風で楽しい思い出ばかりです。

ゆとり  
YUTORI

## 後藤啓二さん 弁護士

交番や捜査1課での現場見習い  
階級でなく懸命さこそ大切と実感。

向けば電車に乗りました。ローカル線でもそこそここの場所だと、駅前にレンタル自転車があり、自転車を借りて町中を走り回るので、社会人になってからも勤務地の近くに出かけ、愛知県警警務部長時代は県内の三河、尾張地方や岐阜、三重両県まで足を伸ばしていました。

なぜ警察庁に  
後藤 学生時代に「少しでも社会をよくしたい」と考えて官僚になろうと思いましたが、最初から警察庁に行くとは思っていませんでした。官庁訪問で、

先輩の話を聞いてやりがいのある仕事だなと思って決めました。悪と対決するところだから素朴に正義感が実現できると思ったのと、地方勤務ができるのが魅力でした。

昭和57年に警察庁に入庁しました  
後藤 4月から東京・中野の警察大学校で3カ月の研修です。今は個室ですが当時は5人部屋で午前6時にラップの音で起床します。1週間で慣れましたが、最初はかなり衝撃的でした。研修後、兵庫県警に赴任し、生田署の生田前交番

に配属されました。神戸の繁華街にある交番だったの酔っ払いの保護やけんかの仲裁で明け暮れました。

第一線で市民と接する貴重な経験ですね  
後藤 3カ月の見習い期間でしたが、当時のことは今でもよく覚えています。

今回、「法律家が書いた子どもを虐待から守る本」を執筆中に鮮明に思い出したこともあり、真夏の昼

## 新 西談 関笑



間、「車内に赤ちゃんが置き去りにされている」と人が交番に駆け込んできました。同僚と駆け付けると、炎天下の中で赤ちゃんが泣いていて、窓ガラスを割って救出した直後に母親が戻ってきた。そのときに直接困っている人や命を救える仕事だ」と充実感を覚えた記憶がよみがえりました。

その後  
後藤 7、10月までの交番勤務を終えて、生田署と兵庫県警捜査1課で半年ほど刑事の見習いをくまなく担当した。殺人事件が多く、担当刑事に同行させてもらうくらいで、何のお役にも立てなかったのですが、現場の捜査の大変さや被害者の無念、遺族の悲しみを非常に強く感じました。

現場で得たものは  
後藤 2年目の4月に本庁に戻り、それまでと一転し法律や制度の整備に携わりました。現場ではキャリアで階級が上だからといって人もは動かす、一生懸命仕事を初めて受け入れてもらえるということを実感しました。それは、その後の自分にとっても大きな経験でした。



昭和57年、兵庫県警生田署の生田前交番に配属された後藤啓二さん。「現場では一生懸命仕事をして初めて受け入れてもらえる」と実感したという

（聞き手 池田祥子）